

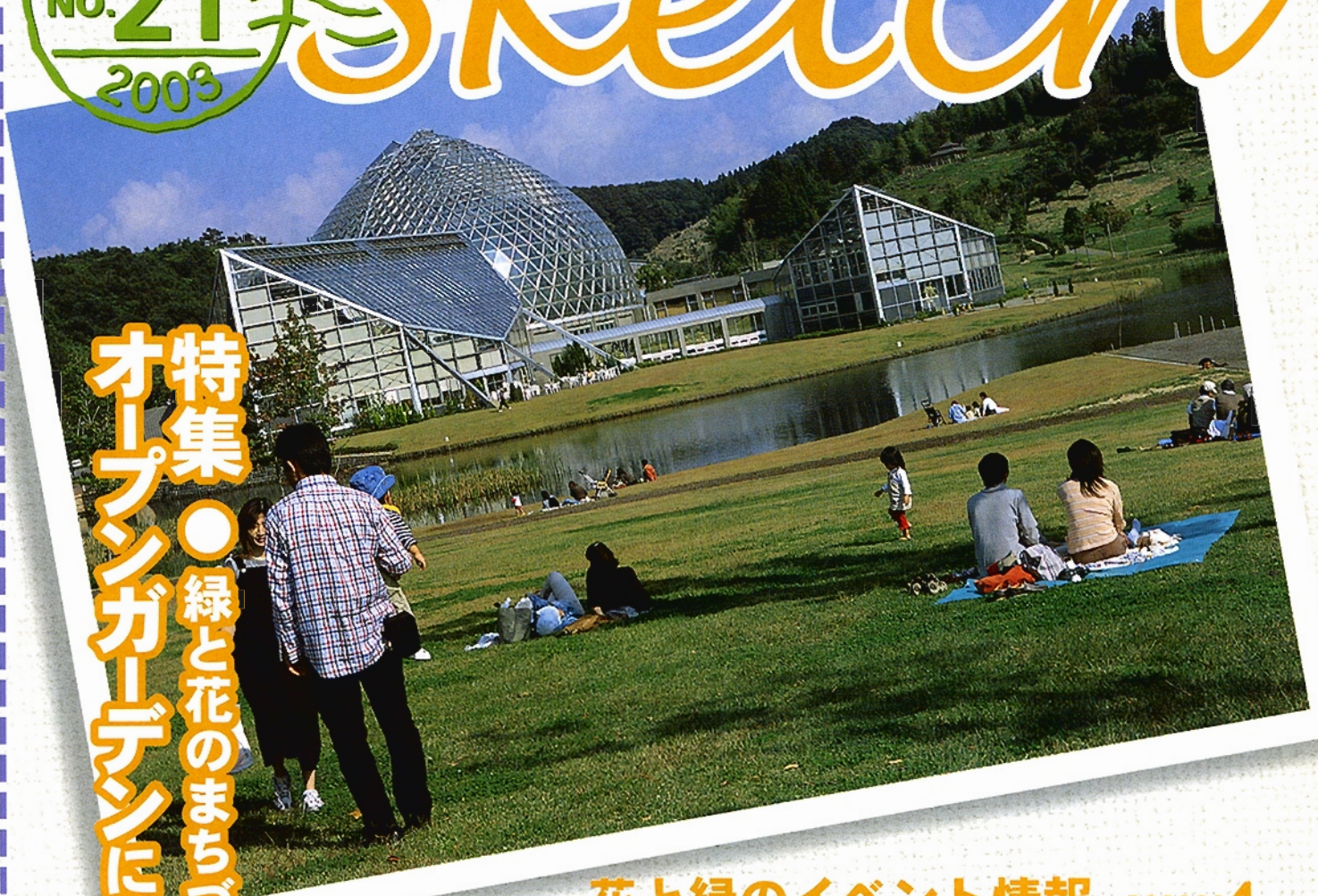
花と緑の情報をお届けします。

Green Sketch

グリーンスケッチ

秋号
No. 21
2003

特集 ● 緑と花のまちづくり
オーブンガーデンによるまちづくり



花と緑のイベント情報 ……4

新潟県立植物園「緑の百年物語フェスティバル」、「5周年記念講演会」他

植物に親しむ ……5

小さな秋を取り入れた「山野草の寄せ植えづくり」をご紹介します。

花と緑のアドバイザー交流会 ……6

花と緑の普及啓発についてお話をいただきました。

にいがた四季の散歩道 ……7

〈名木・巨木編〉昔から親しまれ愛されてきた、歴史ある木をご紹介します。

●読者の広場 ●花と緑のお悩み相談室 ●緑花センター掲示板



財団
法人

新潟県都市緑花センター

にいがた「緑」の百年物語に参加しています。





オープンガーデンによるまちづくり

● オープンガーデンの事例

オープンガーデンは、住民が主体で運営しているところがほとんどです。

このように、全国で初めて住民と行政の共同によるオープンガーデンが小布施町（長野県）で行われています。ここではその取り組みについて紹介します。

● 日本のオープンガーデン

日本でも、個人の庭を一般に公開するオープンガーデンが各地に広がっています。

日本のオープンガーデンは、それぞれの地域で公開方法などが異なり、日時を限定した有料のものから年

前号の「緑と花のまちづくり」の特集は、地域づくりの視点から緑と花の活用を紹介しました。それは、緑や花が地域や人との結びつきのきっかけとして、非常に効果的であること。共有の庭として誰でも参加できるコミュニティガーデンが、これからの緑化推進の新たな手法としての可能性があることです。

緑と花のまちづくりには、「学校教育と緑」、「官民一体のパートナーシップ」、「地域住民の交流連携」といったことも重要なキーワードとなります。

そこで、今回の緑と花のまちづくりに関する話題は、身近な空間である家庭の緑化とまちづくりについて取り上げてみたいと思います。

近年のガーデニングブームは緑や花への関心を高め、家庭での庭づくりが盛んになっています。

丹精こめてつくられた個人の庭園を、広く一般に公開し観賞するオープンガーデンという取り組みが広がってきています。

この取り組みを紹介しながら、緑と花のまちづくりについて引き続き考えてみたいと思います。

◆ 小布施町の花のまちづくり ◆

昭和55年に小布施中学校に緑化部が誕生し、その緑化活動が始まりました。始めは、学校で苗を育て、地

中無料公開しているものまで、様々なかたちで行われています。

その規模についても、一人あるいは何人かの地域の人が集まって行うなど様々です。

域の花壇に花を植えていました。その後、老人クラブによる花づくりや自治会を単位とする「町を美しくする事業推進委員会」が沿道の花壇づくりを行い、いまでは町のいたる所に花が植えられています。

住民による花のまちづくりが広がりをみせる一方で、行政側はうるおいのある美しいまちづくり条例の制定、町並み修景事業など小布施町の景観保全や整備を行い、住民と行政が共同のまちづくりを進めています。

オープンガーデンのはじまり

オープンガーデンは、1972年にイギリスで設立された「ナショナル・ガーデン・スキーム」(以下NGS)という慈善団体が、個人の庭園などを一般の人々に公開し、それに関わる収益を看護・医療などの公益団体に寄付するという活動から始まりました。

一般公開される庭に関する情報は、一冊の本にまとめられ、年1回発行されます。この表紙が黄色であることから、通称イエローブックと呼ばれています。

イエローブックに掲載されるには、NGSの厳しい審査があります。また自分の庭がチャリティーに役立つことから、庭主の誇りともなっています。



小布施中学校

プランターや花壇で花いっぱいです。学校花壇は全国的な花壇コンクールに入賞した実績があります。撮影時はあいにく花が少ない時期でした。



▲小布施中学校 学校花壇



▲小布施中学校 校門前

オープンガーデンと緑と花のまちづくり

◆オープンガーデンの効果◆

オープンガーデンを見るために全国から年間2万人以上（推定）の観光客が訪れ、観光客とオーナーとの交流も始まりました。

この取り組みを実施してからは、その周辺の住宅も庭先をきれいにしているとところが増えてきているそう

◆オープンガーデンの取り組みのきっかけ◆

平成元年から9年にかけて小布施町では、ふるさと創生事業の一環として、花で彩られた美しい町並みのあるヨーロッパで住民を対象にして、「花のまちづくり研修」を実施しました。イギリスのオープンガーデンを視察した時、研修参加者から小布施町でもオープンガーデンを行ったらどうかと提案がありました。この提案をきっかけとして、行政側から住民に声を掛けてこの取り組みが始まりました。

◆オープンガーデンの現状◆

当初、平成12年にスタートした時の登録は38軒でした。その後、毎年更新のたびに登録件数が増加し、現在では67軒となっています。オープンガーデンは、町の広報で参加者（オーナー）を募り、オーナーの好意によるボランティアで運営しています。行政から庭の管理などに関する資金援助は一切なく、オーナーの方々がすべて行います。

です。

オープンガーデンはいわゆる地域緑化の見本園でもあり、そのオーナーは気軽に開ける庭づくりのアドバイザーとしての役割も果たしています。

これらのことから、オープンガーデンの効果として、1つは緑花の推進に役立っていること、もう1つは町の観光資源となっていること、さらに地域の枠を越えた人の交流が生まれていることなどが挙げられます。

小布施町の役割は、庭を公開してくれるお宅にオープンガーデンの看板を設置すること、オープンガーデンブックを作成して町内に配布することです。登録されている庭には個人庭園の他、町内の小中学校や公共施設などが含まれています。

行政の役割が情報発信に限られていることで官民の連携を緩やかに保ったまちづくりの形成に繋がっているのではないかと思います。

現在、オーナー同士の交流は、年に数回の意見交換やオーナーによるオープンガーデン巡りが行われ、オープンガーデン通信の発行など自主的な活動も始まっています。

このように人の交流や緑や花が地域への広がりを見せる反面、植物の採取やゴミのポイ捨てなど訪れる人のマナーがこの取り組みの問題となってきました。

まちなかの花壇



▲道路沿いの花壇

まちづくりの面からは、子供や大人、高齢者が緑や花に対する興味と関心を持ち、自発的に緑や花にかかわっていくことによって、それぞれの視点と立場から緑と花のまちづくりに貢献していると言えます。

◆家庭緑化とまちづくり◆

緑と花の美しいまちにするためには、公共施設などの緑化を行政が支援するとともに、一軒一軒の家庭でも庭に木や花を植えるなど、しだいに地域へと広がり、互いに連携された緑と花のネットワークを形成する必

▼フローラルガーデンおぶせ

当初、地域の花好きな人の研修所としてつくられた施設でしたが、今では小布施町の観光スポットにもなっています。
庭園、温室、売店があります。入園は有料。



◀その隣には広い芝生が広がっています。
▼玄関までの間に様々な植物が見られます。



公共用地



▲生徒がつくった手作り看板
植物の名前がわかるようになっています。

▶日陰棚をめけると芝生の周囲に様々な宿根草が見られる庭があります。



▲オーナーの仕事場の隣に手作りのガーデン。左側には畑もあります。

民有地



▲道路に面した部分を開放的な庭にして、道を通る人がそのまま觀賞できるようにしています。植栽の裏に柵で囲まれたプライベートガーデンがあります。



▲オープンガーデンには、このような和風庭園も含まれています。

●小布施町で見られるオープンガーデン

要があります。
緑と花の人づくりは、家庭や学校、地域で植物に親しむ体験を通して育まれ、さらに人との交流が地域を越えて交流連携することにより、地域の担い手としての緑化活動の継続や広がりへと繋がります。

緑や花のまちづくりの原点は、家庭の緑化にあるといえます。
地域に密着したオープンガーデンは、家庭から始まる緑化推進の一手法として、緑と花のまちづくりを進める上で、その果たす役割は大きいと思われれます。

【緑花推進シンポジウム開催】

地域の自然や生活環境に合わせた緑花推進の手法を考えるシンポジウムです。緑化ボランティア団体、行政、業界団体が一緒に地域の特徴を活かした緑と花のまちづくりを議論します。

平成11年度に第1回のシンポジウムが魚沼地区から始まり、上越、下越、新潟地区と毎年開催してきました。最後となる第5回のシンポジウムは、中越地区で開催します。皆さんぜひご来場ください。参加費は無料です。なお、配布資料の準備の都合により、事前に申し込みください。当日会場でも受付いたします。



▲昨年度の新潟地区シンポジウムの開催状況です。

- 日時： 平成15年10月31日(金) 午後2時
- 会場： 長岡グランドホテル 長岡市東坂之上1-2-1
- パネリスト：高橋 長究氏(花と緑の環境づくりネットワーク会長)
古畑 正則氏(長岡市立前川小学校元PTA会長)
川瀬 弓子氏(三条市 檜の森)
渡邊 常侃氏(出雲崎妻入りの街並景観推進協議会会長)
亀田 由香氏(長岡造形大学 環境デザイン学科 4年生)
- コーディネーター兼パネリスト
小林 良範氏(花と緑のアドバイザー 三条ホテルの会会長)

シンポジウムの内容は次号(1月号)で紹介する予定です。

■詳しいお問合せは：TEL025-257-8711

新潟県都市緑花センター 田中、村田まで

●テーマ：緑と花のまちづくり ～地域からまちへ 緑を活かしたまちづくり～

植物に
親しむに

山野草の

寄植えづくり

ご家庭で小さな秋を取り入れた寄植えを飾って楽しみましょう。

準備するもの

- ナンキンハゼ ……2ポット
- タカネノコンギク 1ポット
- ウメバチソウ ……1ポット
- ケト土
(植物が堆積してできた繊維質
からなり、ねばりのある黒い土)
- タイルもしくは木の板
- 受け皿 (大)

管理について

- 置き場所
植えてからしばらくは
半日陰で育てましょう。
風が強く吹き抜ける所
は避けましょう。
- 水やり
植付け直後は、霧吹きを使っ
て全体にゆきわたるようにし
ます。土にさわり、乾き具合
をよく見てから与えましょう。
全体にゆきわたるように四方
から水を与えてください。



タイルや水盤、木の板などの上のせて、できあがりです。すぐに水盤にのせると土が崩れるので、タイルや木の板にのせ、土がおちいたら水盤などに飾りましょう。

③土をまとめる

しっかりと形にまとめて、土が崩れないようにします。土をまとめたら、底の部分を平らにします。

④できあがり

POINT

できですくは、ティッシュペーパーなどで土をまいて、崩れないようにします。
自然にティッシュがなくなってくると、土がきちんとまとまります。

①ケト土をこねる

ケト土を入れた受け皿に水を入れ、よく混ぜてこねます。

②ケト土をつける

ナンキンハゼをポットから出し、土を落とします。根のまわりにケト土をつけます。

ウメバチソウ、タカネノコンギクも同様に土を落とし、ナンキンハゼの根元に添え、さらにケト土をつけます。

緑花センターでは、県立植物園において様々な緑や花に関する教室を開催しています。

10月19日(日)に『今人気の苔玉をつくってみよう』と題した教室を開催します。講師は、緑花センター花と緑のアドバイザーの片岡充さんです。

この教室では、参加者の皆さんから実際に苔玉をつくってもらい、持ち帰っていただきます。定員20名です。参加希望の方は事前にお申込みください。なお、材料費2,000円がかかります。(写真は、今回の教室でつくる苔玉の見本です。)



花と緑のアドバイザー交流会

●主催：財団法人新潟県都市緑化センター

●開催日：平成15年7月14日(月)

●開催場所：新潟フシントンホテル

(財)新潟県都市緑化センターの「花と緑のアドバイザー」の方々から、緑花活動を通じたまちづくりや緑花推進などについてお話をいただきました。

自然再生と生物多様性

五十嵐 実 氏 (日本自然環境専門学校)

国や県で話題の生物多様性や生態系の保全は、地域づくりや緑化の観点から自然を保護する部分と、人間が都市のなかで楽しむ部分に分けて考える方向性がある。

自然を再生、保全する自然再生推進法が成立した。復元が主流となる公共事業では、自然と人間のゾーニングの調整が大切。

地域づくり

石山 和史 氏 (株式会社景)

私が住む農村集落は小学校に自然生恵園がある。農村でも生き物に触れる機会が少ない。

全村公園化を目指し、巨木や柿の木などの田園風景を農村の原風景として残して、郷愁を感じる農村にしたい。新潟、福島、山形3県に自生するヒメヤブリの群生地を復元を目指す。緑や花も、公園づくりも、森林を守ること全て人づくりから。

緑の広がり

佐藤 祥子 氏 (株式会社グリーンシグマ)

ビオトープ空間や緑地計画は土地(公共用地、民有地)の確保から。設計は、地域の生物の多様性を確保するため、ビオトープなどの専門化のノウハウを聞きながら行う。

五十嵐 実 氏

都市にいかにも自然を引き込むかという観点で、ビオトープや緑地のネットワーク化が重要。

学校ビオトープづくりでは、地域の土を一面に貼り付けて、植物は導入しない。希少な植物が大団に繁茂する自然の復元より、種子が混じった土を使って、自然の復元を誘導してやるのが大切。学校ビオトープは子供たちが命とふれあう場として実感する教育的な効果があり、希少な動植物を保護していく点の部分である。更に、河川流域などをモデルに、子供たちや地域の方を学校の中から地域の自然に誘導し、点から線や面へと広がる。

小林 正吾 氏 (いがた森林の仲間会)

山から郡会まで線を一括にとりあつていている。例えば、山の中にソメイヨシノを植えるという生恵的におかしいことが緑百年物語の場で行われているのではない。シレンマを感じている。ふな林帯など本来人間が手を入れない原生林的な自然と、里山地帯など人間と自然が共生し持続する二次的な自然を仕分ける必要がある。市街地は人間がつくり、育てる二次的な自然である。里山の方が生物の多様性にすぐれている。緑百年は、これらをはっきりさせて推進していくべき。

以前、杉を植える運動があった。当時は自信を持って行ったが、今となると正しくなかった。この線を踏んではならない。百年後の豊かな環境づくりとして、杉林や落葉の二次林、照葉樹林などのモザイク的な緑の森ができてほしい。

緑と花の人づくり

片岡 道天 氏 (株式会社日園)

子供たちは生き物に対する対応を知らない。秋に植えたチューリップの球根が

冬を越し、春に花を咲かせることに感動や驚きがあるように、子供たちが生き物とふれあい、触り、摸むような機会を社会の仕組みとして考えるべき。

本間 英樹 氏 (森林インストラクター)

子供の育成では、例えば、雪の中で青々としている雪割や雪上のうさぎの足跡などを観察して、自然や命の大切さを理解する機会を持つことが大切である。地域の森や川を最もよく知っている地元の人との関わりが大切。

重泉 朋子 氏 (有限会社泉花園)

小学校でサポーター委員として植物の講師をしている。種から育てる子供と苗を与えられた子供の行動を比較すると、苗を与えられた子供は水まきという次の行動に移れない。

子供たちが何かを感じとるため、花と緑のアドバイザーが地域で小学校に関わることが必要。

公園の利活用とアドバイザー活動

石黒 正平 氏 (株式会社石黒園園)

木や花を生産している。文化的な生活を営む中で緑の無い環境は、恥ずかしいという意識がほしい。地域で緑や公園の活用度が少ないのは、植物や動物と一緒に楽しめる公園のリフォームが必要。

上木 優子 氏

フラワーデザイナーの仕事では、自然の中から木の実や種などを採取したり、

自分で育てた植物を作品にして生活に取り入れることを提案している。庭やプランターの花などを生活空間に飾り、自然や身近な緑、花について考える契機になるとよい。

藤田 吉和 氏 (古来の里ファーム)

ハーブは、農業生産の一環として定着させたい願いから始まった。昔、子供たちは田んぼでドジョウや昆虫を採取できた。ハーブづくりの面から、自然に接近できる植物づくりとして子供が収穫や食べる喜びを経験できる、ハーブの中の木苺、ラズベリーなどを普及させたい。

佐藤 賢一 氏 (有限会社佐藤樹木事務所)

植えるだけがスタートではない、木の保全、森のあり方を考える。そんなスタンスで行わないと良い成果が生まれない。植えるのは大事、守るのはもっと大事である。

新保 正文 氏 (新保造園株式会社)

営、民家の庭には食用として柿や梨の木などが植えてあった。公園にその地域に自生する植物を植えて、子供たちに音から植物とどのようにして付き合ってきたか教える、或いは文化を伝える場になることで公園利用も広がる。

鈴木 重吉 氏 (株式会社鈴木造園)

緑を酸性雨などの環境問題として捉え、環境保全、環境保護を考えていくことが大切。緑を育て、守り、自然と共生すること

の大切さをアドバイザーが地域に知らせる必要がある。

中野 繁子 氏 (株式会社エデン新潟店) アドバイザー同士が講習会活動の内容などを話し合う場が必要。

中野 正剛 氏 (森林インストラクター) 木を植えて、それをどう管理し、どう利用し、どう活用していくのかが大切。

渡辺 一郎 氏 (株式会社渡辺園園) 昔ながらの木や花、大自然のよさを公園の中へいれたい。

緑の効果

青山 清道 氏

(新潟大学積雪地域災害研究センター) 日本全体が地震の活動期、緑化は防災効果が高い。新潟市は特に緑の少ない都市と思う。防災上特に緑地帯をふやすことが重要。

共に高度経済成長をとげ、高齢化社会を迎えているドイツは、日本と比較して都市に緑が非常に多い。日本も高齢化社会に向け緑地帯をふやし、緑を介して楽しい人生を送ろう。



現在、花と緑のアドバイザーは県内各地の54名の方が登録されています。